

SDGsに学ぶ

ありふれた日常のなかに

浄土真宗本願寺派総合研究所 上級研究員

おかざき ひでまる
岡崎 秀磨

恐怖の週末。私はそう呼んでいます。

息子たちは、平日は学校での勉強、宿題、友達との遊び、習い事と、時間が足りないくらいです。しかし、週末はそうした予定がほとんどありません。だったら週末くらいゆっくり過ごせばいいのですが、ダラダラする平日と違って、週末に限って早起きして、私の顔を見るなり言い出すのです。

「どっか行きたい!!」「遊び行こ!!」

「どうしようか」と答えながら、妻に助けを求めますが、私が仕事に行かない日は「あなたに

任せた!」とばかりに我関せずです。

これは、週末くらい大好きなお父さんに遊んで欲しいと息子たちが言っている、という心温まる話ではありません。息子たちはとにかく退屈なのです。何の予定もなく、一日中何をしてもいい、という時間を持て余しているのです。ですから、私が「どこに行きたい?」と聞くと、「面白いところ!」というか、「イオンのゲームセンター!」と答えるのです。時間を持て余し、お父さんに頼めば何か面白いところに連れて行ってくれるんじゃないか?」「学校楽しいか?」「肘ついて食べない!」

ないか。そんな期待の眼差しを受け続ける週末。私にとっては「恐怖」でしかありません。

ところで、時間を持て余して、何かいつもと違うことをしたいと思うのは、息子たちだけでなく、私をはじめ誰にでも経験したことがあるはずです。同じ事を繰り返す日常を離れて、旅行やディナーに出かけたり、記念日のお祝いなど、いつもと違う「特別」を求めることがあります。

「一生に一度の経験」「一年でこの日だけ」。あるいは、「いつもと違う休日」など、「特別」にも色々あります。これらはとても大切なことです。しかし、「いつもと同じ」「変わらない日常」はそれ以上に大切なことかもしれません。先日、「子ども食堂」を実施されている方にお話を聞く機会がありました。その方は、「普通の食卓を提供すること」が一番の目的だと言われました。

「そろそろ鍋の季節だね」「この魚の名前わか

る?」「学校楽しいか?」「肘ついて食べない!」食卓を囲んで、些細な日常の出来事を話す。こんなありふれた食卓でさえ経験していないお子さんがいらっしやるそうです。私たちにとって「当たり前」の「変わらない日常」が足りてないのです。誰かと一緒に食事をする。旬のものの話を聞く。嫌いなものを残して怒られる。きれいに魚食べられたね、とほめられる。食事の時だけでなく、「おはよう」「おかえり」という。通学路での友人とのたわいもない会話。家族でTVを見ながら笑いあうひととき。

私たちがともすると「退屈」だと感じることもある日常、「当たり前」が繰り返していく毎日こそが、私たちを大きく支えているのかもしれない。そして、「誰かがいてくれる」、そんな「当たり前」の大切さをもう一度見直すことからはじめたいと思います。

※SDGs(エスディーズ)とは:

国連で採択された貧困や教育、環境問題などの十七項目にわたる「持続可能な開発目標」。詳しくは、第二四二号にて解説をいただいておりますので、そちらをご覧ください。